ついてない、憑いてる、ついてない？

屑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ついてない、憑いてる、ついてない？

【Ｎコード】
Ｎ２１２９Ｕ

【作者名】
屑

【あらすじ】
少年にとってついてないのは当たり前だったので大抵の不運には動じなかった。
だが、その日、少年は人通りの少ない夜道でそれこそ不運によりトラックに轢き逃げされてしまう。少年は三途の川で自分の死が手違いで生き返ることが出来ることを知り、試験を受ける。
その試験の内容とは、二十四時間以内に好きな人に告白すること！？

連載小説としていますが、かなり短めです。
少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

人生最大でついてない日

俺がツイてないのはいつものことだったので、飼い主が見て見ぬふりをして置いて行った犬の排泄物を踏もうが、電車が止まろうがあまり気にしていなかった。だが、あの日はあまりにもツイていなかったというか、おそらく人生で一番ツイてなかったのだ。

それはもう、深夜の人通りの無い道路で大型トラックにひき逃げされるぐらいに。

目覚めると、俺は地下鉄のプラットホームに独り立っていた。俺の周りは無機質なコンクリートに囲まれて、線路は暗闇に消えぽっかりと空いた黒い穴が延々と続いてる。

焦るというよりも茫然自失。壁の標識には、右には天国。左には地獄。何をどう受け入れればいいのか分からなくなり、誰かと話したくても誰もいない。

気持ちの整理ができないまま、先の見えない線路の先から一両だけの小さな電車がやってきてプラットホームに停まる。乗っている人はいない。

「次は〜天国〜。次は〜天国〜」

アナウンスが次の行先を告げる。降りてくる人はいない。乗る人は俺だけ。天国とか地獄とか実感が湧かない。それよりもまさかたった十七歳で生涯を閉じることになるとはいくらなんでも予想しがたいことだった。悲しむこともできなかった。現実が、受け入れられない。

「ストップ！！　ストップ！！　乗っちゃダメです！！」

電車に乗り込もうとした俺を服を掴んで止めたのは、俺より小さい少年。彼は駅員の恰好をしているが年は俺より若い。見えて小学生程度だ。

「な、なんで？　もしかして俺、地獄行？」
流石に絶対天国に行けるような聖人君子ではない。だが、かと言って絶対地獄に落ちる悪逆非道というわけでもない。これも俺の運の悪さが招いた結果なのだろうか。
「いえいえ、あなたのいくところは今のところ、天国でも地獄でもありません。実はあなたが死んだのは、こちらの手違いでして……」
「それはつまり……」
「あなたは、生き返ることができます」
少年の言葉を聞いた途端、俺は膝から崩れ落ちた。いや、正確には気が抜けて立っていられなくなったのだ。死ななくていい安心感が全身に染み渡る。
突然その場にへたり込んだので、駅員の少年が慌てふためく。
「ど、どうしたんですか！？　気分でも悪くなりましたか？」
「いえ、安心して」
駅員の少年は安堵した顔をして、俺に手を差し伸べた。その小さな手を取って立ち上がる。
「申し遅れました。私は笹川と申します。この三途の川の駅員をしています。今回はこちらの手違いで大変なご迷惑をおかけします」と笹川は帽子を脱いで腰を直角に曲げる。ここは丁寧にお辞儀を返すべきなのだろうが、そんなことより気になることがあった。
「ここって三途の川だったの！？」
駅員の笹川は小さな顔を縦に振った。一面花畑と清い川のイメージが圧倒的に強いのだが。笹川は俺の表情を読み取ってか、こうなった経緯を話し出した。
「昔はお花畑と川でしたが、なんでもあれを維持管理するのがあまりに大変だったらしく、近代化志向もあってこんな殺風景になったんです」
三途の川にも色々事情があるのか。知らなくて当然のことに、何故か驚いた。精神がまだ安定していないのか。
とりあえず深呼吸。

「なにはともあれ、俺は生き返ることができるんだよな。じゃあ早く生き返らせてくれないか」
途端、笹川の顔が歪む。とても申し訳なさそうでとても申し上げにくいことを言う前の顔をしている。まさか、何か不幸が残っているというのか。
「それが、誠に申し上げ難いんですが、生き返るには試験がございまして……」
「試験！？　なんでそんなのがあるんだよ！！」
俺が死んだのは、三途の川側の落ち度だ。それなのに試験があるのはあまりに理不尽すぎる。というよりもなんで蘇生するのに、試験なんか設けるんだ！？
俺の怒声がトンネルの中を反響して消えていく。
「そんなこと言われましても、規則は規則ですから。なんでも犯罪者予備軍を生き返らせるわけにはいかないからだそうです」
「犯罪者予備軍とか、そんなのどうやってわかるんだよ！？」
「さぁ、私にはさっぱり」と、笹川は首を横に振った。
「まぁ試験の受けなければ死にますから。どうしますか、死にますか？」
初めの態度と何も変わらない笹川に背筋が凍る。雰囲気が変わったのだ。小さな体が俺より大きくなったように圧倒されてしまう。笹川は相も変わらず、丁寧口調で話を進める。
「あなたは分かってますか？　生き返るチャンスがあるだけ有難いことが。あなたがウダウダ言ってる今この時に、あなたよりも若い子供が死んでいってることを。自分が不幸だと嘆いているときに、生まれる前に死んでいく命を。この世界が平等なわけがないでしょう。この世界は全てが理不尽で出来ているんです」と、笹川は一呼吸おいてこう付け加えた。
「それで、どうしますか。試験を、受けますか？　受けませんか？」

想いと絶望

騒音まがいの目覚まし時計の音に目を覚ますと、俺は家のベットに寝っ転がっていた。時計は午前七時を指している。日射しがカーテンから乾麺のように射し込んでいる。

試験終了まで後十七時間。

上半身を起こして、腰を捻って腕を回す。骨が気持ちいい音を鳴らすだけで痛みは無い。昨日のトラックの事故がまるで夢のように思える。だが、目の前の駅員姿の少年がその幻想を壊した。

「お目覚めですか」

笹川が俺の前をふわふわと浮きながら話しかけていた。今は三途の川の駅員としてではなく、試験の監視役として俺に憑いている。

今日の深夜零時に俺は笹川と共に現世に戻された。トラックはもう何処にもいなかった。その時は地団駄を踏んだが、今考えると、トラックの運転手は放置自転車を轢いたとしか思っていないだろう。それにいない方が好都合だった。もしトラックがいたら無傷の俺が絶対問題になる。警察や救急車を呼ばれたら、試験に合格できないのは必至だった。

「試験終了まで後十六時間五十六分ですね」

時計が七時四分に進んでいる。いつもならもう少し寝ている時間なので眠気がまだ残っている。ベッドから降りて、支度を始める。ベッドから降りてきた笹川が机の上の手紙を指さす。昨日、家に帰ってきてから急いで書き上げた俺の思いを綴った手紙だ。

「その手紙は誰に渡すんでしたっけ？」

「川越菜々美、俺のクラスメイトだよ」

言ってから顔が熱くなる。親しい友人にも言ったこともないことを笹川に言おうと思ったのは俺にもわからないが、笹川は俺以外の人には見えないらしいので、気にしないことにする。

菜々美と初めて会ったのは、二学期になった学校の始業式を終え

た教室。いわゆる一目惚れだ。転校生として入ってきた菜々美を見た瞬間、俺の人生が百八十度変わるような勢いで回り始めたような気がした。菜々美のためなら何でも出来るような気さえした。透き通った声を聞いたとき、どんな声よりも綺麗な声であるように思えた。その笑顔を見たとき、穢れが洗われていくようだった。出会って一ヶ月だが、俺は一生分の愛を菜々美に捧げる覚悟があった。これ以上の恋が出来ないとすら思う。

これを聞かれたら笑われるだろう。若気の至りだとか、そんなことは有り得ないとか言われるだろう。それでも俺はそう思えるほどに、恥ずかしいくらいに菜々美が好きなのだ。

支度を終えた俺は一階に降りると、母さんが俺と弟のお弁当を作っていた。

「母さん、弁当出来てる？」

「後、五分待って」

俺は出されたパンにバターを塗って、牛乳で流し込む。それを見た笹川が忙しい朝ですね、と一人ごちる。無視して、パンを食べ続ける。俺以外がいるところで笹川とは話したくない。傍から見れば一人ごとの多い少年になるからだ。テレビを点けると、最近現れた放火魔がまた事件は起こしたらしい。場所は結構な近所。物騒な世の中になったものだ。

「はい、出来た。行ってらっしゃい」

「行ってきます」と俺は完成した弁当を持って家を出た。

家の前に止まった自転車の残骸を見て、溜息を吐きたくなる。俺の傷を治してくれたのだから自転車も直してくれても良いじゃないかと思ったが、神は俺が思う以上にケチらしい。俺は親から借りた自転車に跨ってペダルを力一杯踏んだ。

学校に着いた俺は下足室で周りを確認する。落ち着きのなく辺りを確認するその姿は不審者だ。俺は誰もいないことを確認してから、

菜々美の下駄箱を開けた。中には丸みのある字で川越菜々美と書かれた上靴が閉まってある。俺は鞄から手紙を取り出した。本当にそんなもので大丈夫なんですか、という質問に俺は無言で頷いた。誰にもばれず手紙を入れる任務を終えた俺は教室に行く。

「そういえば、本当にこれが試験なのか？」

「ええ、信じられないと思いますがこれが試験なんです」

笹川が提示した試験とは、生き返ってから二十四時間以内に想い人に告白すること。これを初めて聞いたとき、笹川が冗談を言っているのだと思った。だが笹川は本気で、俺は今実際にその試験をやっている。笹川が言うには、人間には好きな人がいるのが当たり前。いないのは、犯罪者予備軍――と笹川の上司が言っていたらしい。

う～ん、どこでも上の人間が考えることは分からない。教室に着くと、当然誰もいない。ドアが開いているのは我らが熱血担任のおかげだ。誰もいない整然とした教室で場違いな大欠伸が出る。やはり無理が祟った様だ。急激な眠気に襲われる。机に突っ伏した俺はそのまま笹川に声を掛けることもなく眠りについた。

突然の鈍痛に俺は叫びにならない声を上げる。最初に目に入ったのは笹川。だが、目を合わせた笹川は激しく頭を振り、後ろを指さす。頭を押さえながら振り向くと、そこには腰に手を当てた般若――我らが担任――が仁王立ちで睨んでいた。

「よう、佐々木おはよう」

「……おはようございます」

「ところで、今何時だ？」

教室の掛け時計に目をやると、八時十分を少し過ぎていた。一限目が始まる時間は八時十分。チャイムにも気付かず爆睡していたのか！！

「八時十二分ぐらいですね」

「そうだな、お前、俺の授業を初っ端から寝るとはいい度胸してるじゃねーか」

担任は笑みを浮かべながら、こちらから目を離さない。あれ、お

かしいな、背後に漫画の効果音が見えるぞ！？　蛇に睨まれた蛙になった俺は頬を引き攣った笑顔を向ける。担任は一度大きな溜息を吐いてから教壇に戻っていった。俺は心の中で深く息を吐いて前に向き直る。

「今日の休みは川越だけか」

その言葉に俺は後ろに自分でも驚くべき勢いで振り返る。そこにはいつも俺に笑顔を振りまいてくれていた菜々美はおらず、ぽっかりと空いた席の後ろにあまり関わり合いのない女子が座っている。俺は目の前がどんどん暗くなっていくような気がした。笹川はすぐ横にいるはずなのに、とても遠くから聞こえてくるような気がする。菜々美がいない。それは俺の死がほとんど確実に決まった瞬間だった。

火事と晩餐と告白と

それからというものの、下校時間になるまでの間、九割近く記憶がない。頭にズキズキするのだが理由を覚えていない。授業の内容もお弁当の中身も覚えていない。記憶に残っているのは菜々美が学校を休んだということと、俺の死がほぼ確定したということ。笹川は俺の横で憐れみを持った表情で見つめてきている。もうどうしようもないのだろう、やっぱり俺の人生は不幸で幕を閉じるようだ。誰もいなくなった教室にいるのは俺と笹川だけである。

どうせ死ぬのなら、最後は好きなものを食べてベットの上で眠るようにして死にたい。俺は教室を出て町に向かう。後ろから笹川が無言でついて来る。近くのスーパーでお菓子を買えるだけ買おう、ジュースも買おう、最後の晩餐だ。

死ぬことは悲しむことではないのだ。人間いつかは死ぬ。俺はそれが少し、ほんの少し早かっただけなのだ。

スーパーに行く途中で多くの人たちとすれ違う。俺は今どんな顔をしているのだろうか……？　無理矢理ポジティブにならなければ泣きそうなのがわかる。表面上だけでも死を受け入れなければ感情が溢れ出してしまう。泣けば誰かが同情してくれるのか。だけど、同情されれば何かが変わるのか。同情は神に抗えられる力を俺に与えてくれるのか。残念だが、人間はそんなに凄くはないのだ。運命は変わらない。スーパーが見えてきた。

「火事だ――――――！！」

唐突に耳に入ってきた声に俺は身を震わせた。声はスーパーの方から聞こえてきた。まさか神は俺に最後の晩餐すらさせないつもりか！！　だがスーパーからは煙は上がってない。燃えているのはスーパーの裏手にある民家。俺のそばをたくさんの人が横切っていく。野次馬魂は誰にもあるものなのか。俺もその一人だ。こんな時でもやはり、非凡なことが起こるとそれが心をくすぐる。俺はスーパー

から後ろの民家に路線変更。民家の周りはすでに多くの野次馬が囲んでいた。大口を開けて家を見上げる者、携帯で写メを撮る者、何処かに電話をしている者、やっていることは三者三様である。家は半分の燃え方が激しい。外から故意に燃やされたような燃え方だ。

「知ってるか、これ例の放火魔の犯行らしいぜ」

俺の疑問に答えるように野次馬の二人組の会話が聞こえてきた。

「マジかよ！？」

「マジマジ、さっき聞いたんだけど、ここから逃げるように去って行った奴を目撃した奴がいるんだってよ。それと実は中に人がまだ残ってるんだってよ」

「おいおい、それ本当かよ！？　誰か助けに行かねーのかな？」

誰も行かねーだろ、死にたくねーもん――野次馬の二人組の話が聞こえたのはそこまでだった。そうか、中にまだ人が残っているのか。俺より少し早く死んでしまうのか、もしかしたら三途の川で会えるかもしれないな。俺は踵を返し、少し距離があるが別のスーパーに向かう。そこのスーパーは火事のせいで機能していない。

「どこに行くんですか？」

その場を去ろうとしていた俺を笹川の声が制した。振り返って笹川と向き直る。二人の沈黙が周りの喧騒に包まれる。笹川の眼は明らかに非難していた。その目に俺は深く大きな溜息を吐いた。そして口火を切る。

「もういいだろ、これも運命だったんだよ。俺が死ぬのも、中の人が死ぬのも。それとも何か、この事件もそっちの手違いなのか？お前らの仕事はそんなにいい加減なのか？」

きっと俺はとてつもなくひどい顔をしている。命を見捨て、命をあきらめて、人としての顔をできているのだろうか？　周りにこの声は聞こえているのだろうか？　一人で意味不明なことを言っているこの少年に気付いているのだろうか？

「あなたが中の人を救うかどうかはあなた次第です。ですが、ここであなたが見捨てたならあなたは地獄に行くことになります」

何で、と俺が聞く前に笹川が話を続ける。
「そんなに驚かなくても。それは当たり前でしょう、助けられる命を見捨てた人が天国に行けるほど甘くありませんよ」
そうやって笹川は俺を追い詰めようとする。無理矢理にでも中の人を助けさせようとする。天国を選ぶのか、地獄を選ぶのか、そんなの一択じゃないか！！　俺は家に目をやる。さっきより火の手が広がり入ることすら危うい。俺は人混みを掻き分け、制止する声にも従わず家の中に跳びこんだ。
家の中はもうあちこちが炎に包まれ、行ける場所が限られている。熱さで呼吸がしにくい。俺は袖を口に当てながら炎の僅かな隙間から人影を探す。見逃していたら救うことができないだろう。人影を見つけられない俺が見つけたのは、二階に上がる階段。それは天国への導きか、地獄の入り口か、そんなこと確認してる暇なんてない。俺は二階に駆け上がった。
「いたっ！！」
二階の廊下、探し人はそこにうつ伏せに倒れていた。恐らく煙を吸いすぎたのだろう。それならば早く連れ出さなければ、ここまで来た意味がなくなる。俺は倒れていた人に駆け寄った。所々が黒く汚れている。俺は少し考えてから倒れている人の両腕を持って肩に回した。そして、体を背中に乗せる。おんぶをした俺はすぐそこまで迫っている死から逃れるために階段を一段飛ばしで降りる。一階の火力はすぐ俺たちを呑み込もうとしていた。俺は一直線に走った。熱気に包まれようとすぐ近くで何かが爆ぜる様な音が聞こえようと駆けた。開いたドアから外が見えた。
ドアに跳びこむ。顔を地面に擦ったが気にしている暇はない。大きく息を吸って吐く。酸素がこんなに美味しく感じられる日が来るとは思わなかった。俺を囲んだ野次馬たちに口々に讃えられた。俺はそんなことは正直どうでもよかった。
ゆっくりおんぶしていた人を降ろした。よく見ると、女性で、どこかで見たことのあるような。というよりも、こいつは。

「菜々美！？」
俺の声のせいか、周りの声のせいか、俺が助けたパジャマ姿の少女――俺の想い人である菜々美――が咳をしながら目を覚ました。目が霞んでいるのか目がしっかり開いていない。俺の顔をしばらく見つめて、少し首をかしげる。何かを言ったようだが小さすぎて聞き取れない。俺が耳を近づけて菜々美の言葉を聞こうとしたが、後ろからの強力な力に引き剥がされた。
「救助者二人確保！！」
俺を引っ張ったのは、消防隊員だった。俺たちは救急車に運ばれ、放水が開始される。救急車は二台。俺と菜々美を運んでくれるものだろうが、俺にはまだやることがある。
「菜々美！！」
俺の呼び声が菜々美に聞こえているかは分からない。それでも伝えたかった。俺の想いを。試験とかそんなものは関係なしに言いたかった。
「菜々美！！　好きだ！！」
その瞬間、急に意識が遠のき、目の前が真っ暗になった。

人生最大についていそうな日

あの事故にあってから二週間後、俺は病院のベットの上で目を覚ました。勿論だが笹川はもういない。

返事が聞けず、目の前が真っ暗になったときはさすがに死んだと思ったが、合格条件は好きな人に告白すること。実るか玉砕するかは別問題――と笹川から聞かされた。目の前が暗転して、目覚めたときは前と同じプラットホームに立っていた。目の前に立った笹川にそこで試験合格を言い渡された。

試験が終了し、あの日俺が関わったことは殆んど無かったことか、捻じ曲げられている。あの日、俺は事故で学校を休んでいたことになっている。菜々美宅の火事は事実だが、俺がその場に居合わせて、救出したこと。そして告白したことは揉み消されている。菜々美は駆け付けた消防隊員に助け出されたことになっている。そして、あの事故は試験の前日だったので、俺は一日のタイムラグを置いて重傷を負うことになった。目が覚めたときの予告なしの激痛は耐えがたいもので、年甲斐もなく号泣しそうになった。

なんだか、空しさが残る終わり方である。あれだけ頑張った事実が気泡に帰すとは納得がいかないというか。まぁ、勢いで告白したみたいになったから、退院したら今度はちゃんと告白することにしようと考えている。

噂をするとなんとやら、制服姿の菜々美がやってきた。火事の後は精神が安定しないこともあったが最近はすっかり落ち着いたようだ。

俺が軽く手を挙げると、菜々美は笑顔を返してくれた。相変わらずその笑顔に癒される。

「例の犯人がやっと捕まったみたい」

例の犯人とは菜々美の家を燃やした放火魔のことだ。ようやくと言えばようやくか。

「やっとか、よかったじゃんか」
「それで、あの手紙のことなんだけど……」
あの手紙？　自分に覚えのない話題に曖昧な相槌を打つ。菜々美はなぜかたった今全力疾走をしてきたように、顔が熟れたトマト状態になっている。
「家のごたごたとかもようやく収まってきたし、気持ちも落ち着いて、きたから、その、返事を……しようとお、思い、まして」
菜々美の言葉の歯切れが悪くなり、最後は敬語になっている。
手紙、手紙、手紙。頭をフル回転させて記憶を巡らせるとある一つが引っ掛かった。ま、まさか菜々美の言っている手紙とは俺がある日菜々美の下駄箱に入れたラブレターのことか！！　それがわかった途端俺の顔が菜々美そっくりに染まる。
こんな状況下で笹川が最後に言った言葉を思い出す。――近々いいことがあるそうなので期待していてください。
どうやら今日は良いことがあるようだ。

人生最大についていそうな日（後書き）

最後まで読んでいただき本当にありがとうございました。
火事の中での焦燥感とか疾走感がうまく書けませんでした。わかりにくてすみません。

ご意見ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2129u/

ついてない、憑いてる、ついてない？

2011年6月24日22時25分発行